

くずれゆく日本語の言語生活

ー 50 年にわたる言語意識の変化からー

The Decline of the Japanese Language Life



公益財団法人日本漢字能力検定協会 現代語研究室長

佐竹 秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

✉ shinjin.sat@gmail.com

1 はじめに

今、日本語は静かに変わろうとしている。その変化は、インターネットやAIと関係はあるけれど、それらが直接の原因ではない。何年も前から、変化の下地が作られてきたものである。また、変化は急激で気づきやすいものではなく、徐々に人々の心に浸透してきている。そして、若者言葉やネットスラングなどといった表層の言語現象よりも、日本語を使う人たちの言語意識において、より強い変化が起こりつつある。

表層の言語現象の変化はいつの時代にもある。しかし、例えば、ある新しい語句が使われるようになって、日本語全体にかかわることはないし、私たちの言語生活が大きな影響を受けることもない。だが、意識の問題となると、その影響力は大きい。言語意識が変化すると、言葉をどのように使うべきかに関しての考え方が変わる。考え方が変化するのだから、これまでの使い方にはなかった用法が出現したり、よくないとされた形式がよいものになったりすることもある。

そのことは、日常のコミュニケーションのありようにも変化をもたらす。意識の変化は時間をかけて起こっているのだから、年齢の離れた世代間で明白な違いとして認識されるだろう。その結果、古い表現は駆逐され、新たな表現形式にとって代わられる。言語表現の適切さが変化するのであるから、企業における言語活動にも当然影響が及ぶし、根本的な国語や日本語の教育にも影響する。

ここでは、50年近い年月の言語意識の変化を追いかけて、その変化の本質について考える。

2 50年前の特徴的表現

2.1 書き言葉の話し言葉化

今から50年近く前、筆者は、当時、若者雑誌と称されたものを何冊か選んで、その表現を調査、分析したことがある。次はその中の一例である。

ところが、そんなバカ高いお金を出さなくても、お洒落感覚抜群の粋なイタリアものが気楽に買える専門店が、T O K Y Oにもあるのです。

先進のハイテックでまとめた洒落たインテリア。その中に**よだれもの**のアロハやベグ・パンツ、カーペンターパンツなどが整然と並んでおります。……

で、1 Fが〈ボール〉、2 Fが〈カンパニー〉のショップに**なってます**、前者はフリーな感覚の遊び着、後者は、アダルト感覚のカジュアル、といった風に、それぞれ持ち味は違うけれど、いずれもハイセンスな服たちで**いっぱい**なのだ。……

で、この夏、こんなリーズナブルなイタリアもんを**あたしゃ**お勧めしますぞ。

（雑誌『POPEYE』1980年4月10日号）

今の人が読めば、なんの不思議もないふつうの文章であらう。しかし、当時の一般的な文章を見慣れた目には、かなり奇異な印象を受けるものであった。

例えば、第3段落、第4段落の冒頭が「で」で始まっている。ふつうなら「それで」「だから」などが使われる。「なってます」は「なっています」、「あたしゃ」は「わ

たしは」と書く、「お薦めしますぞ」の「ぞ」は書かない。これらは、いずれも一般的な文章では使わないものである。そして、日常の会話でなら使われるものである。つまり、当時の若者雑誌の文章は、書き言葉なのに話し言葉の表現が混じっていたのである。

話し言葉が混じるという観点から見直せば、上の例文に「バカ高い」「よだれもの」といった俗語が使われているのもうなずける。要するに、書き言葉が話し言葉化していたのである。そこで、このような表現の文章の文体に対して、筆者は「新言文一致体」と名付けた。

2.2 新言文一致体の特徴

書き言葉が話し言葉化している事実は、単に当時の若者雑誌だけではなく、資料館などを訪れた若い見学者が書いた感想ノート、マンガ作家へのファンレター、さらには、若者向けの小説にも認められた。その特徴を整理すると、次のようなものが挙げられる。

(1) 表現上の特徴

まず表現面についてみると、次のような特徴的な例を挙げることができる。

- ①それがめっちゃ速くて…。
- ②ケーキじゃないんだ、タルト・キャンドルなんだな。
- ③それはですね、なんとホテルにひとりで行っちゃって泊ってきちゃうんですよ。
- ④マブい男が3人くらいでさ、声かけてくるじゃん。
- ⑤おっと洗濯も簡単、すぐ乾いちゃうしね。

例文の文末部分には、①の言いさしや、②③⑤のような終助詞の使用が見られる。また、ふつうの書き言葉では見られない、②「じゃ」、③「行っちゃって」「きちゃう」、⑤「乾いちゃう」といった「じゃ」「ちゃ」の融合形が見られる。⑤「おっと」のような挿入語句も、書き言葉ではあまり見られない。さらに、②では本来は「ないのだ」「なのだ」が、話す口調の「ないんだ」「なんだ」に、③では「のです」が同じく「んです」になっている。その他、④「マブい」という俗語・流行語の類も見られる。これらは、いずれも話し言葉ではよく使われるものである。

(2) 表記面の特徴

表記に関しては、まず片仮名や記号の多さが目につく。

- ①そんなことすえたい イヤで、負けたくない！
- ②生まれてから、ずう〜〜っつと、片思いしか知らないっ！！

③そういうのって、すっこくスキだなあ〜と思うのです。

④申し訳ないからホメルってワケでもない。

⑤ステキなテーマ曲も決まりましたっ♡

片仮名で書かれた①「イヤ」、③「スキ」、④「ホメル」「ワケ」、⑤「ステキ」は、漢字や平仮名で書くほうが一般的だろう。それをあえて片仮名表記をしている。また、文末に記号が使われているし、文中にはあまり使われない「〜」の使用も見られる。さらに、①「すえたい」、②「ずう〜〜っつと」のような、一般的な表記をあえて外した非標準的表記と言えるものを使っている。

片仮名の表記をしているのは、「イヤ」「スキ」といった感覚、感情や「ホメル」「ステキ」のような評価にかわる箇所が多かった。非標準的表記の「すえたい」「ずう〜〜っつと」は程度や状態を強調する箇所である。これらについては、書き手が、自分が感じたことや思ったこと、および、それらの程度を強調するねらいがあったと推測できる。そのために、その箇所を目立たせる意図で一般的でない表記を使用したと解釈できる。

2.3 新言文一致体を支える意識

新言文一致体は、書き言葉なのに話し言葉のように書かれていたものである。これが生まれたきっかけについて確証はなかったが、当時のラジオの深夜放送番組への投稿がかかわっていたと思われた。そこでの文体がまさに新言文一致体であったからだ。

さらに、投稿はがきの文章にそのような文体が生まれた理由としては、当時の若者たちに「話すように書けばよい」という意識が強かったためだと考えられる。つまり、思いつくまま話すように書くことが、文章を楽に書ける方法だったのではないかと推測された。

かつての作文教育では、今もそうかもしれないが、「うまく書けない」と苦しむ児童に、教師は「思いつくまま感じるままに書けばよい」と指導していた。その教育成果も新言文一致体に寄与していたのではないかと推測された。

新言文一致体の文章を書くためには、考えて文章を作るよりも感じて思いを吐き出す作業が中心となる。感じて書くのだから、文章の内容・表現は感覚的にならざるを得ない。文章の中で目立つ感情や評価を表す語、程度や状態を強調して示す語、文の調子を示す文末部分は、いずれも感覚にかかわり、特別な思い入れをこめて表記された。新言文一致体は感覚的な文章だったのである。

3 30年前の特徴的表現

3.1 話し言葉のソフト化

30年前には、書き言葉ではなく、話し言葉の世界で、当時の若い世代を中心に新しく特徴的な語法がいくつか見られた。それらには、共通して表現をやわらげる効果を認めることができた。そこで、それらに対して筆者は「ソフト化」と名付けた。

以下、その特徴を2点に整理し、代表的な例を挙げて説明しよう。

(1) 断定回避表現

- ①「私は毎朝散歩をするじゃないですか。だから、……」
- ②「その人、会ってみてどんな感じ？」
「もう会いたくない、みたいな…」
- ③「みんな、進路が決まってくじゃん。自分一人だけ置いていかれたみたいで、超ヤバイらしい。それで、親は勉強してるのって聞くの。『全然してない。勉強って聞くと、頭痛くなるらしいよ』って答えてる」
- ④「北海道行ってたんだって」
「うん、高校時代の友達とね」

「ホント？ 本当は、彼とふたりで行ってたりして…」

第1の特徴は、断定することを避ける表現の存在である。上に挙げた例文で下線を施した部分が、いずれも断定を避ける役割を果たしている。

①の「じゃないですか」は、例えば「冬の朝は寒いじゃないですか」「そうだね」というように、発言内容が一般的に成り立つことについて、聞き手に同意を求める形式である。それなのに、①では、他人が知るはずのない自分のことに使っている。同意を求めるつもりはなく、「じゃないですか」を付けて、表現をやわらげているにすぎない。もし自分のことで断定した発言をすると、それについていろいろ質問される可能性が生まれる。それはうまく説明できなくて面倒なことになるかもしれない。その点「じゃないですか」を使うと、相手の確認をとったことにできて便利なのである。

②は、自分が会った人物の感想を聞かれた場面である。そのとき、印象がよくなかったとする。「もう会いたくない」との答えでは、自分自身の気持ちの表現としては、それがすべてでないような気もする。そんなとき「もう会いたくない」と断言しては、会った相手を傷つけることにもなる。それを避けるのに「みたいな」は役立つ。

③で「らしいよ」を付けない表現にすると、厳しい、強い断定の印象を与えてしまう。しかし、これを使えば、まず意味がやわらかくなる。さらに、「らしいよ」を付けておけば、発言内容に万が一間違いがあったときにも、許してもらえる可能性が生まれる。

④「たりして…」の場合も、それを付けておけば、それまでの発言部分が相手の気分を害する可能性があっても、冗談にしてすませることができる。

(2) ボカシ表現

- ⑤「趣味はなんですか？」
「テニスとか…」
- ⑥「お皿のほう、お下げしてよろしいですか」
「お勘定のほう、こちらになります」
- ⑦「あたしは、結構ノリやすく、結構移り気かもしれない。少し前はフラワーアレンジメントやりたくて、この間はハムスター飼いたくてと、結構遊んでます」
- ⑧「私は、人から誤解されやすいんですけど、意外と明るいんです」

第2の特徴は、表現の一部をぼかして、全体の意味を曖昧にするものである。

⑤では、趣味を聞かれたとき、テニスが趣味と言い切るほどではないとする。テニスだと明言して、さらに細かい質問をされてもわずらわしい。そんな意識が働いた場合に、「テニスとか…」と答えることになる。

⑥「のほう」も、対象になるものをぼかして曖昧にする効果がある。曖昧にすることで、表現対象に対する相手の認識を不明確なものにする効果が生まれる。正確さや厳密さを問題にしたくないときに有効である。

⑦「結構」、⑧「意外と」は、発話者が自分について語る際に、自分自身のことをストレートに言わずにすむように付けた一種の注釈である。「結構」、「意外と」を加えると、全体の意味内容の不明確さが増す。よって、これらを加えずに言う場合と比べると、自分に対する印象を弱めることができる。もし、ストレートな表現で言うことで問題が生じる恐れがあるときなど、その可能性を減らすことができる。

以上の(1) 断定回避表現も(2) ボカシ表現も、どちらもはっきりした明確な表現を避けるという性格もっている。そして、それは、表現者が相手からいろいろ言われて面倒に巻き込まれることから救ってくれるという利点もっているのである。

3.2 ソフト化の意味と使用者の意識

では、なぜそのような表現を使う必要があるのか。その理由として、表現の使用者たちが不安や恐れをもっているからと考えると説明がつく。

時代は20世紀末、世の中はバブル崩壊による経済的な落ち込みが長く続き、若者たちは就職氷河期と呼ばれるような閉塞感が漂う状況にあった。そこに、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件といった日常が崩壊するような災害や事件が続いて起こった。人々の意識の底には、先行きの見えない不安と何が起こっても不思議ではない恐怖が根付いていた。

そのような中では、だれも将来の予測ができないし、自分自身がどのように振る舞えばよいのか保証してくれるものはない。多くの人たちは、自分の発言の正当性、妥当性や責任に関して自信が持てないでいた。そのため、相手の考えとずれていることに不安を感じたり、それによって仲間から浮いてしまうのではないかと恐れたりすることになる。さらには、自分のミスや相手とのずれを、相手から指摘されるのではないかと心配していた。

このような不安や恐れをもった人たちにとって、自分の意見、発言が全く無視されるのは嫌だったが、その意見、発言が相手に反発されることもないようにしたかった。そのための方策として、断定を避けたりぼかししたりすることはかなり有効な手段だった。

断定回避表現やボカシ表現は、相手から無視されず、かつ、相手に強く当たりすぎないことを目的とするので、結果的に表現はやわらかいものになった。つまり、言語使用に関する不安や恐怖が、ソフト化という現象を生み出したのであり、ソフト化表現は、結局、話し手自身を守る表現だと考えられるのである。

4 この10年の日本語の特徴的表現

4.1 間接的表現と表現の画一化

この10年間、東日本大震災という原発がからむ大被害の影響が残る中で、やはり閉塞感が漂うままであった。さらに経済は上向かず、格差社会が拡大するばかりという状況にあった。そんな明るい展望のないところに、コロナ禍という未曾有の体験を強いられた。そこでは、対面の制限、インターネットの活用というコミュニケーション手段の大きな変化を強いられることが生じた。

それまでは紙面や直接の口頭によって行われてきた多くの表現が、インターネットの中に埋没して、個人が実際にどのような日本語表現を用いているのかを正確に把握することは難しくなっている。特に、SNSといった、オープンではない仲間内での表現は、それぞれ、特殊な、いわば方言的な性格をもつ可能性が高く、一般化しにくくなっているからである。

そのような中でも、公衆を対象にした言語表現からは、いくつかの特徴的なものが見出される。以下、2つの大きな特徴について例を挙げて述べる。

(1) 意見や意思の間接的表明

- ①「この調子ですっと続けていけたらいいなと思います」
「少子化問題というのは、なかなか厳しいのかなかと思っております」
- ②「このようなスタイルの店が、今後増えていくのかもしれません」
「日本の歴史を塗り替えるかもしれない、そんなニュースです」
- ③「今の映像、すごくないですか」
「ああいうのって許されていいいんでしょうか」
- ④「お茶をもらっていいいですか」
「ごはん少なめにしてもらっていいいですか」

第1の特徴は、自分の意見や考えを述べるときに、明確に述べないというものである。断定や主張、依頼を弱めている表現で、30年前のソフト化表現が進化したようなものと言える。

①は意見や考えを聞かれたときに、「…だと思ふ」と断言せずに、「…なと思ふ」「…かなと思ふ」のように「な(かな)」をはさむ。断定回避の効果がある。

②は、やはり意見や考えに「かもしれない」を付けるものである。「かもしれない」を付ければ、論理的には実質的な主張の意味が消滅する。発言者はそれがわかっていないとは思えないのに、これがしばしばみられる。もうクセになっているかのようである。

③は相手に同意を求める場合、④は相手に依頼をする際の発言だが、いずれも疑問形が使われている。疑問形を使うことで、相手への圧力が緩和される。これもソフト化の進化と言えよう。

以上の①～④の意見や意思の間接的表明は、結局、かつてのソフト化表現が進化したものだ、ととらえることができる。

(2) 表現の画一化

⑤ 「…づらい」の拡大（「…にくい」の消滅）

- ・「道路工事の影響で排水溝の水が流れづらいようです」
- ・「部屋のドアが開きづらいのが気になります」

⑥ 「いただく」の拡大（「くださる」の消滅）

- ・「メールを見ていただいたのでしょうか」
- ・「そちら様からご連絡をいただければ、ありがたく存じます」

⑦ 「なさる」の消滅

- ・「これまでご活躍されてきましたが…」
- ・「ご家族にはもうお話しされたのですか」

⑧ 「させていただく」の蔓延

- ・「このたび立候補させていただきました」
- ・「ご指名に預かりましたので、一言お祝いを述べさせていただきます」

以上の⑤～⑧の共通点は、複数の表現形式が可能であるのに、使い分けたりすることもなく、一つの表現形式だけが選ばれやすくなっていることである。

⑤はその一例で、近年、その動作や動きが困難な場合に「…にくい」が使われることが減って、ほとんどが「…づらい」に代わった。少し以前なら、その動作が物理的に困難な場合は「…にくい」、心理的に困難な場合は「…づらい」のような使い分けがあった。例えば、⑤の例の場合、心情のない水やドアでは「流れにくい」「開きにくい」がふつうだった。そして、人間が水を流したり、ドアを開けたりするのが、他人の迷惑になるためにためらうときに「流しづらい」「開けづらい」を使っていた。それが、今ではほぼ「…づらい」になっている。

⑥～⑧は敬語に関するもので、いずれも複数の敬語形式が可能なのに、ほとんど一つの形式が選ばれている。

⑥は、「くださる」と「いただく」の両方の表現が可能なのに、「いただく」が使われる。⑥の場合「見てくださった」や「ご連絡をくだされば」という言い方も可能はずだが、現在は「いただく」が圧倒的に多い。

⑦の例文はどちらも誤用である。「活躍されてきた」「話された」と言えば正しいところを、より敬意を高めようと「ご」「お」を加えたために失敗した例である。「ご」「お」を加えるなら「ご活躍なさって」「お話しなさって」と「なさる」を使えば正しい敬語表現になるのだが、なぜか「なさる」は、ほとんど耳にすることがない。

⑧はすでに多く指摘されている問題である。「させて

いただく」の使用には、「相手や第三者の許可・承諾を得ていること」「自分自身が利益や恩恵を受けること」が要件とされる。⑧の例はいずれも要件に合致しない。多くの人が「させていただく」を好んで使っている。

以上、近年の表現には、間接的表現、つまりは進化したソフト化表現と、複数表現が可能な場合の表現形式の画一化が認められるということである。

4.2 この10年の特徴的表現の意味

こうした近年の特徴的表現は何を意味しているのだろうか。

まず、ソフト化表現が進化した傾向の理由としては、30年前の「表現内容に関する自信のなさ」というよりも、自分の発言によって不利益が生じることを恐れているように考えられる。本来、表現の自由が認められているのだから、自分の考えを断言しても問題が何もないはずである。ところが、実際にはそうではないと多くの人が感じている。その背景としてインターネットの存在が大きい。特にSNSが隆盛を極める中、マスコミとは関係のない一般人であっても、自分への批判がいつでも、些細なことでも起こりうることを知っている。そのような中で、批判されることを避け、クレームやトラブルを回避しようとすれば、下手な断言はご法度である。

そういう「不安や恐れ」対策の意識が強まると、日常のやりとりにおいても慎重な表現が生じる。ちょっとした考えや要求を表明する際にも、直接的な表現をせずに、疑問形によって同意を得ようとすることになる。直接的な表現をした場合、相手と考えが異なったりズレがあったりすれば、相手は自分を肯定的に扱ってくれない可能性が高まる。そのような対立が表面化することはなるべく避けたいと考えるのだ。また、要求を疑問形で述べるのは、従来の配慮形式と同じではあるが、より間接的な表現になっている。従来のレベルの表現では、相手への配慮が十分でないと思うからではないか。

つまり、ソフト化表現の時代よりも「不安・恐れ」の意識が高まり、同時に、「不安・恐れ」への対策が強化されたと考えられるのである。

他方、第2の特徴である表現形式の画一化の現象は、場面や文脈によって使い分けの意識がなくなっている結果だと思われる。異なる表現を使い分けて、より適切に表すよりも、決まりきった表現で無難な表現を目指す方が安全

なのだ。表現のニュアンスなど、もはや考える必要のないことなのだろう。無難路線で進むには、とにかく他人の表現と同じものを使用すれば、問題がなくなると思っているにちがいない。他人と同じ形式を使うことによる安心重視、言い換えれば「不安対策」と見ることができる。

敬語形式は、本来、表現を使い分ける点で面倒くささの最たるものだった。その敬語に関して他人と同じ単純化された形式を使用する傾向があるのだ。それは、表現の正しさを気にしてミス避けようとする意識の強さを証明するものだとも言えよう。周囲で使われている形式を使用すれば、ミスを避けられるし、同時に他人と同調することによる安心も得られると考えているのであろう。

近年の特徴的な言語表現には、他人から否定、批判されることを避けようとする意識が存在していると考えられる。みんなが使っている表現形式を使っていれば安心なのだ。要するに、異なるものを使うことは、トラブルを起こす可能性があり、それを避けるには、みんなと一緒にがよいというわけであろう。

5 50年の流れの果てに

言語表現の特徴として、50年前には「感覚的」というキーワードが認められた。30年前には、自分の意見を表明することに対する「自信のなさ」、自分の考えが否定されることに対する「不安や恐れ」が、表現をやわらげる形式を生んでいた。そして、この10年では、不安や恐れが増大し、それへの対策として、意見や考えの対立が生じないようにするために、他の人と「同調」して「単一化・単純化」された表現を選ぶようになってきていると見ることができる。

近年、ネット社会における無責任な情報が広がり、社会的な問題を引き起こしている。ネットで情報を得たときに、不確かな情報を拡散するかどうかを決めるのは、「快・不快」の感覚が中心になっているという指摘がある。そこでは「好き・嫌い」という感情にまで至らない、情報を見た瞬間のその人の感覚が拡散の決め手になるというのだ。確かに、「ヤバい」「キショい」「ムリ」など、一言ですませてしまう表現も感情以前の感覚的な反応を示すものと言える。今の言語認識をとらえると、50年前の「感覚的」がどんどん進化してきたことになる。

物事に対して、感覚的に反応し、不安・恐怖という感覚

から身を守り、他人と同調することを好む。そのため、多くの人が使う単純、簡単化された表現を志向することになり、形式的な同一の表現の蔓延を生む。そこでは、表現選択にかかわる思考力は不要となる。そもそも表現対象が、快・不快に二分された単純な感覚しかない。その単純な感覚を表すのだから、周囲に転がっている手垢にまみれた表現で十分である。表現を選択するプロセスの思考過程は必要ない。他人と同調する力さえあればよいのであって、言語表現の適切さを考える必要はないのである。

要するに、いかに表現すれば自分の考えを適切に表現し、それをきちんと相手に伝えられるか、また、それによってよりよい人間関係を作れるか、などという思考は不要になる方向に向かっているのだ。その結果、思考のプロセスを経ない表現が飛び交う言語生活が展開される可能性が高くなる。さらに、AIの進展やインターネット環境の変化は、それを後押しする環境を作るのに適している。

思考を必要としない言葉による暮らしの進展、それは日本語がその特長を捨て自滅する道を進み始めていることではないのか。また、思考のない情報世界は、AIにとってより制御しやすいはずだ。改めて考えてみると、日本語は50年にわたって、AIが支配する世界を着々と準備してきたかのようである。

思考を踏まえて紡ぎ出した言葉を交わし合う、まっとうな言語生活を取り戻すには、学校教育だけでなく企業においても、言語表現がもつ価値や役割を指導する取り組みが必要である。そして、それをするのは、今しかない。

参考文献

- [1] 佐竹秀雄（1980）「若者雑誌の言葉―新・言文一致体―」『言語生活 343』筑摩書房
- [2] 佐竹秀雄 佐竹秀雄（1992）「新言文一致体の計量的分析」『武庫川女子大学言語文化研究所年報 3』
- [3] 佐竹秀雄（1995）「若者言葉とレトリック」『日本語学 14 - 12』明治書院
- [4] 佐竹秀雄（1997）「若者言葉と文法」『日本語学 16 - 4』明治書院
- [5] 佐竹秀雄（2023）「謙譲表現に見る敬語認識の変化―敬意の表示から丁寧さの重視へ―」『Japio YEAR BOOK 2023』一般財団法人日本特許情報機構
- [6] 佐竹秀雄（2024）「敬語の近未来予測―敬語システムの崩壊―」『武庫川女子大学言語文化研究所年報 34』